

# マルサス著『経済学原理』の両版の一比較

——吉田秀夫訳『マルサス経済学原理』の補正を手がかりにして——

柳 田 芳 伸

## I. はじめに

本稿は吉田秀夫訳『マルサス経済学原理上・下』（岩波書店、1937年、——以下、吉田訳と略記）の補正を糸口にして、『人口論』とならぶマルサス（Thomas Robert Malthus）の主著である『経済学原理』（——以下、『原理』と略記）の両版、すなわち T. R. Malthus, *Principles of Political Economy*, 1st ed. (London: John Murray, 1820); T. R. Malthus, *Principles of Political Economy*, 2nd ed. (London: William Pickering, 1836) に関して一校勘をくわえようとするものである。とはいえ既に、価値論（価値尺度論を含む）、利潤論、および地代論については、精緻を極めた両版の校合が着実に積み重ねられてきており、筆者はこれらの研究業績から一方的に恩恵に浴するばかりで、ここで屋上屋を重ねる気概など寸豪ももちあわせてはいない。ただ不生産的消費者もしくは個人的奉仕に関するマルサスの見解が、『原理』の改訂過程においていくらか変改されたのではないかという素朴な印象を抱きつつ、両版をいま一度読み返してみようとするにすぎない。

さて、そのための予備作業として、マルサス経済学の研究にたいする「戦前における最大の貢献」<sup>2)</sup>と称賛される不磨の吉田訳をおこがましくも校閲することを掲げているのであるけれども、あらかじめその理由を説明し

ておく必要があろう。吉田訳を除いても、今日までに第2版『原理』は依光良馨訳『マルサス経済学原理上・下』(春秋社, 1949, 1954年——以下, 依光訳と略記)によって, また初版は小林時三郎訳『マルサス経済学原理上・下』(岩波書店, 1968年——以下, 小林訳と略記)においてそれぞれ翻訳されている<sup>3)</sup>。しかもプレン (John Michael Pullen) が初版を基底本にした『原理』の集注版 [J. M. Pullen ed., *T. R. Malthus Principles of Political Economy*, 2 vols. (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989)] さえも編集, 刊行<sup>4)</sup>してくれている。にもかかわらず, なにゆえにいまさら吉田訳に執着しようとするのか。前もってこれを弁明して然るべきであろう。

すなわち吉田訳はたんなる邦訳にとどまらず, 『原理』の両版をくまなく精細に照合し, その差異をあまさず摘出, 明示しようとした最高傑作と呼ぶべき超人的学績である。まさにこの精華こそが他の和訳書に比べて, 吉田訳を断然極立たさせている美点であり, かつプレンの集注版にたいしても実に40年余りも先んじた史上初の快挙と号しえる点である。何よりもまずこのことが銘記されねばならないといえよう。

吉田訳に収められている目次(上5—7頁, 下3—5頁)ひとつを例<sup>5)</sup>にとっても, その出来栄にはただ頭が下がるばかりである。吉田の恩師であり, この訳業を嚆矢した南亮三郎(吉田訳訳者解説下418頁)はこの偉業にたいして, 「この訳書は実に驚くべき努力の結晶である。私はいまだかつて, これほど丹念周到な, これほど煩瑣な努力のこもった訳書を見たことがない。……この仕事は, 常人の努力をもってして能く成し遂げえる仕事ではない。吉田教授のごとき非凡の精力家, 努力家にしてはじめて成し遂げえる仕事である。……ひとりの同学の友として, 訳者の……ここに傾倒せられた超人的努力に深甚の敬意を表したい」<sup>6)</sup>というおしめない賛辞を書き残している。ともあれ現時点においても, 依然として, この吉田訳は和文での唯一無二の『原理』の校異本であり, したがって両版を比較研究しようとする場合の必須文献である。そのゆえに一度は虚心に総点検して

おかれるべき資格を優に有しているのである。

吉田自身は『原理』の「第1版及び第2版の差異は、日本語に現わし得る限りで全部これを示した。」(吉田訳上4頁, 凡例四)と自負している。たしかにこの点においても、吉田訳は個人が発揮しうる限りのなみなみならぬ精力と根気とを傾注した賜であるにちがいないけれども、また同時に「原文のニュアンスを伝えてはいるが、欠文も若干あり、賃金と利潤と誤記しているような個所がかなりみられる。」という批評<sup>7)</sup>をも甘受せねばならないであろう。吉田が凡例で断わっている2版『原理』中の「2, 3の編者註」(吉田訳上3頁, 凡例二)の省略(なおこの8つの編者註は依光訳[上64頁註2, 171頁註2, 226頁註, 下103頁註, 140—1頁註, 146頁註, 237—8頁註, 256頁註]において全訳されている, ちなみに吉田訳では、それぞれ順に、上79頁13行目, 236頁8行目, 317頁7行目, 下140頁12行目, 下140頁12行目, 191頁11行目, 197頁3行目, 361頁4行目の文尾に付されているべきものである)をいま棚上げにするとしても、管見の及ぶ範囲でも欠け目が少なからず存在することにすぐさま気付く。そこで、たとえ筆者の目が届く限りとはいえ、プレンの集注版を手引きにしながら、吉田訳の細瑾を矯正してみようと思いついたのである。これがいまひとつの事由である。以下での作業が向後の吉田訳の利用に資するところあるなら幸甚である。

## II. 若干の用語と訳語の不同の検討

吉田訳の全面的な補正に立ち入る前に、吉田訳における訳語の統一に関連する問題と『原理』の改訂にともなう2, 3の用語のとり替えとを俎上にのせておきたい。これらの大半は原文に照らさない限り確認しえない諸点であり、そのうえ次節での吉田訳の規正においては処理し難いので、先立って瞥見しておく次第である。

たとえばマルサスは初版では「資財 (stock)」(なお吉田訳では、ときお

り「貯財」と訳されてもいる、〔4〕上59, 78頁, 下59, 181, 372頁)という用語とともに、「資本 (capital)」<sup>8)</sup>を併用していた。しかし2版においては、「資財の (通常) の利潤」(〔9〕上66, 69, 153, 157, 271, 286, 288, 297, 310, 311, 329, 338, 340, 348, 356, 362, 382頁, 下80, 125, 154, 155, 160, 212, 219, 324, 380頁)の語法<sup>9)</sup>を除いて、「資財」の「資本」への置換が重ねられている(吉田訳上256, 288, 295, 300, 305, 339, 343, 344, 348, 369, 380, 381頁, 下360, 379頁)。このことは、2版に至って、「資財」と「資本」との峻別が徹底され、わけでもスミス(Adam Smith)の『国富論』の第2篇にみられるような資本の用法<sup>10)</sup>が層一層受用、そしゃくされて、「資本」が「1国の資財のうち、富の生産および分配上、利潤を目的として留保ないし使用される部分」(〔7〕175頁, また〔9〕下80頁)とより明確に把握されているという一証左ではないであろうか。この点、吉田訳では、「資財」と訳されるべきところが「ストック」というルビを付してはあるけれども(ただし下298頁1行目ではルビは冠されていない)、総じて「資本」と訳出されている(たとえば上287, 305, 329, 382, 407頁, 下109, 155, 380頁)ので注意を要するであろう。

マルサスが1814年9月11日ならびに10月9日付でリカードウ(David Ricardo)に宛てた書面に初出する「有効 (effectual or effective) 需要」(〔10〕VII153, 164頁)という語句についても、同様の注釈を必要としよう。すなわちマルサスは初版『原理』までは、「有効需要」<sup>11)</sup>を言い表わすのに effectual demand と effective demand との両者を無差別に混用していた。ところが第2版になると、effective demand という用語も残存してはいるものの(〔9〕上267, 271頁, 下42, 45, 48, 49, 180, 235, 237, 249, 298, 366, 383, 393頁), しばしば effectual demand が effective demand に代置されて<sup>12)</sup>(吉田訳上116, 346, 377, 381頁, 下48, 177, 191頁, 207頁註, 213, 217, 275, 280, 299, 301, 302, 325, 342, 356, 370頁), 有効需要という術語の統一化がおしすすめられている<sup>13)</sup>。このことは、第2版においてはスミスの使用法<sup>14)</sup>をなお一層忠実に摂取、襲用しようと試みら

れた（〔9〕上116—7頁註）ということ物語ってはいないであろうか。吉田訳だけによっては、こうした痕跡を辿ることはままならないけれども、有効需要の語義が『原理』の両版を通しておおよそ不変であると解しえる限りでは（〔10〕VII164頁，〔4〕下167，217頁，〔9〕上140頁，あるいは〔7〕183頁等を参照），とりあえずはこれを等閑視しても大事ないであろう。

また『人口論』では，多義語としてやや濫用されている<sup>15)</sup>「資源 (resources)」という語が，第2版『原理』においておおむね「自然的資源」(〔9〕下221，239，251，301，306，310，377頁)ないしは「物理的資源」(〔9〕下366，386頁)に限定されていく<sup>16)</sup>中で，そのなごりをかすかにとどめているにせよ（〔9〕下37頁），初版では「国の資源」とあった文句の大部が，2版においては「労働の維持のための基金」という語句に置き換えられている（吉田訳下15，16，18，24，71，77頁）ことも黙過できないであろう。この変更を評して，いみじくも「内容の点では本質的な相違はないが，全体系を『資本』の観点から統一しえる表現を採用し，自然資源を想起させる表現をやめた点が注目される」<sup>17)</sup>と概括されているように，こうした訂正を施すことによって，社会の労働階級の境遇を規定していく労働維持のための基金（〔9〕下18頁）を「土地 (landed) 資源」(〔3〕III 197，291，292，307頁)ないしは「土地での資源 (resources in land)」(〔3〕III 182，191，192，194，195，235，239，296頁)，あるいは「農業資源」(〔3〕III 304頁)などから瞭然と切り離して，それは「社会の収入及び資本のうち，労賃の支払いに充てられる部分，その一部分は生産的労働者に，他の部分是不生産的労働者にたいして与えられる」<sup>18)</sup>ものにほかならないという理解を全面に浸透させようとしたと推察される。ともあれ初版<sup>19)</sup>と対比しての2版における「労働維持のための基金」という成句のまんべんない登場を吉田訳からわけなく看取することができるのである（上304頁，下8—9頁，21頁註，22，34，37，39，40，42，44，48，65，73，76，97，102，105，179，180，194，220，285，320頁）。

訳語の不同にも少しばかり目を向けておきたい。吉田は workmen を「労

働者」(〔4〕下299, 321, 346頁)と、また working classes を「労働階級」(〔4〕下361, 371, 379, 408, 409頁)と訳出している。けれどもこれでは、頻出する「労働者 (labourers)」あるいは「労働 (labouring) 階級」(ただし吉田訳下393頁では、labouring classes を「労働者階級」と誤訳してしまっている)との類別が不能となってしまう。workmen を「職人」または「職工」と、また working classes を「働く階級」と訳す方法もあったのではなかろうか。もっとも『人口論』とは異なり、『原理』では「貧困 (poorer) 階級」とか、あるいは「最貧 (poorest) 階級」もしくは「最下層 (lowest) 階級」といった用語はほとんど使用されず<sup>20)</sup>、しかも「労働階級」は「下層階級」ないしは「貧民 (the poor)」と同視されている(吉田訳下49, 68, 108頁)。したがってこの訳語の不統一はさほど拘泥するに足らない瑣事といえるかもしれない。

これにひきかえ、吉田が subsistence に「生活資料」という訳語を充当たり(〔4〕上151, 283, 298頁, 下22, 27, 144, 205, 238, 325, 366頁)、おまけに support までも「生活資料」と翻訳してしまい(〔9〕上224頁)、「生活資料 (the means of subsistence)」と同列に処置してしまっていることは黙止できない。なんとなれば「生存資料 (subsistence) の限界」(〔4〕下177, 179—80, 180, 237頁)という文言からも窺知できるように、マルサスは『人口論』における<sup>21)</sup>と同様に、『原理』においても、「生活資料」を「生存資料」とは截然と判別しながら、細心に配していると推量されるからである。やはり一貫して subsistence は「生存資料」と、また support は「支持資料」<sup>22)</sup>と和訳されるべきであったであろう。ほかに、commodity が「貨財」と、また necessaries や necessities が「必需品」と訳されているのも再考の余地があるようにおもわれるけれども、こういった訳語の適否にはここでは容かいしないこととしたい。

### III. 吉田訳の一補正

それでは、次に列記するような例言のもとに、吉田訳に見出される細瑕を逐次拾い出し、かつそれを適宜に規正していくことにしたい。

1. 吉田訳に訳載されている『原理』の両版の本文を、プレンの集注版とつき合せながら、検査する。したがって吉田訳に所載されているリカードの『マルサス経済学原理評註』（1928年）の邦訳部はこれを対象としない。
2. ここで取り扱われるのは、吉田訳における欠文と明らかな誤訳、それに『原理』の両版の間にみられる異同に関する指示の不備（備考欄では単に「異同」と略記）である。また原文のイタリック体の個所（補正内容欄では傍点で当該部を指定、表示）の見極め（備考欄では「イタ」と略記）も試みた。
3. ただし両版の間に存する差異のうちで、訳文の文意を変更しないほどの軽微な類（原語の誤植の訂正、語順の変更、修辞上の工夫など）と判断した場合には、これを除外している。また既述したように、吉田訳は第2版の編者による註を省いてしまっているけれども、依光訳の当該部（既に示している）の参照にゆだね、ここでは取り上げない。
4. 吉田訳の編集方針にしたがって、[ ]は初版のみに実在する、また（ ）は第2版だけに厳存する記述部であることを示している。

吉田訳補正一覧

番号	吉田 頁	訳 行	補 正 内 容	備考
吉田訳上巻				
1.	19	14	「…理論を有ち、この問題…」は、正しくは「理論を有ち、各派がつねに正当と考えていたこの問題」である。	欠文
2.	20	注	「問題の理論」→「問題の現象」	誤訳
3.	21	3	「く、修正…」は、正確には「く、なんらかの通則または命題に対して、修正」である。	欠文
4.	27	10	「経済学の一般的通則」→「経済学の [受け入れられている] 一般的法則」	異同
5.	33	12	「…廃止が極めて」→「廃止が (極めて)」	異同
6.	36	3	「…している…」→「してい [る] (た)」	異同
7.	37	5	「…している。」→「してい [る] (た)。」	異同
8.	36	7	「517」→「[571] (517)」	異同
9.	39	7	「[物に関する定義]」→「[物に関するある定義]」	欠文
10.	39	12	「少数の重要」→「少数の [有力] (重要)」	異同
11.	40	9	「彼が明かに」→「彼が [明かに]」	異同
12.	40	11	「エコノミスト」→「エコノミストの [体系]」	異同
13.	40	12	「アダム・スミス」→「アダム・スミスの (体系)」	異同
14.	40	12	「主として」→「[主として]」	異同
15.	40	13	「…定義が正確で…」→「定義が (もっとも有益でかつ正確で)」	異同
16.	44	9	「(博物, 等々)」→「(植物学, 等々)」	誤訳
17.	45	6	「(…あろう。教育を…)」は、正しくは、「(あろう。しかもこの分類法においては、富と呼ばれるべきは前者ではなく、後者なのである。)」	欠文



18.	48	17	「(最も非物質的…)」→「(大抵の非物質的)」	誤訳
19.	55	1	「物質物」→「[[物質物] (物質物)」	イタ・異同
20.	55	9	「1国」→「[[1国] (1国)」	イタ・異同
21.	55	10	「量の多少」→「量の[多さ] (多少)」	異同
22.	56	1	「生産的労働」→「[[生産的労働] (生産的労働)」。また吉田訳56頁1-6行の文節中の「生産的労働」はすべて同様である。	イタ・異同
23.	56	1	「エ・コ・ノ・ミ・ス・ト」→「[[エコノミスト] (エコノミスト)」。この点については、吉田訳41頁の訳者註を参照。以下、同様。	イタ・異同
24.	56	7	「富を生産…」→「富を(直接に)生産」	異同
25.	61	6	「かかる場合に」→「[[そのさいは] (かかる場合)」	異同
26.	61	8	「支持せられる」→「支持せられ[う]る」	異同
27.	61	15	「彼等の」→「[[彼等の] (彼等の)」	イタ・異同
28.	62	9-10	この行間に、「(ある人が断言しているように、もしすべての人が、消費するのと同じだけの価値を自分自身で獲得する再生産的消費者であるならば、華美または愉悦のために保持する召使は残らず生産的消費者であるであろうことは明らかである。しかし富および資本の貯蓄または増加が、大多数のこうした再生産的消費者を雇用することによって各自の手中に帰するということはまったく不可能なことである。)」という文節の欠落がある。	欠文
29.	63	8-9	実際には、この行間に、「(そのさい、生産的消費という用語を使用することは、それがアダム・スミスが生産的労働という用語を使用することによって意味しているのとまさに同じ事を意味するように定義されるのでなければ、個人的および国民的貯蓄によって何がもっともふつうに、またもっとも正確に意味されているかをわれわれが説明	欠文

			なしえないようにするであろう、ということが吟味されることになる。)』という文節がそう入されている。	
30.	64	6	「…を引き起す所の」→「[を引き起す所の](にともなう)」	異同
31.	64	16	「もし…」→「しかしもし…」	欠文
32.	65	4	「そして」→「[そして] (また)」	異同
33.	65	5	「…ことは、」→「こと [は] (も)」	異同
34.	66	3	「…、商人」→「, [または] 商人」	異同
35.	66	9-11	「もし…である。」の文節は初版のみ→「[もし…である。]」	異同
36.	67	5	「誇らうとも、」→「[誇らう] (まきっていると主張しよう) とも、」	異同
37.	67	5	「我々の富の…」→「[我々の] 富の」	異同
38.	67	9	「大なる比例」→「大なる [部分] (比例)」	異同
39.	67	12	「閑説する」→「閑説する [であろう]」	異同
40.	67	15	「相違であると呼ぶに…」→「相違 [に帰すこと] (であると呼ぶ) に」	異同
41.	68	1	「, 殆んど十分」→「, [殊んど] 十分」	異同
42.	68	3	「かかる区別」→「[かかるある] (この) 区別」	異同
43.	68	6	「私は、もし…」→「[私は、] もし」	異同
44.	68	10	「, 大なる価値を認めているのは」→「[大なる価値を認めている] (極めて高い評価を抱いている) のは」	異同
45.	76	10	「及び医学…」→「(, 法律上) 及び医学」	異同
46.	76	14	「富の…」→「[需要を増加し、] 富の」	異同
47.	76	14	「その傾向」→「[その] (個人的奉仕の) 傾向」	異同
48.	77	13	「…貧困」→「(その所有が) 貧困」	異同
49.	80	9	「, つねに記憶」→「, [想起] (つねに記憶)」	異同
50.	80	13	「知っている」→「知ってい [る] (た)」	異同
51.	80	15	「しかしその…」→「しかし [彼ら] (そ) の」	異同
52.	80	17	「それ…」→「[それゆえ] それ」	異同

53.	81	4	「入れられえ」→「入 [り] (れられ) え」	異同
54.	81	17	「その目的」→「[私の] (その) 目的」	異同
55.	83	5	「しかしながら,」→「[しかしながら] (それにもかかわ らず),」	異同
56.	85	5	「ある物品」→「ある [物品 article] (物 object)」	異同
57.	85	6	「貨物」→「[物品] (貨物 commodity)」	異同
58.	85	7	「貨物」→「[物品] (貨物)」	異同
59.	85	8	「1物が他の物」→「1 [貨物] (物) が他の [貨物] (物)」	異同
60.	85	9	「獲得する難易」→「獲得する [難易] (困難)」	異同
61.	85	11	「(彼らの生産する)」→「(彼らの生産したり, あるいは 購買する)」	欠文
62.	85	17	「…を得る」→「得 (りう) る」	異同
63.	87	4	「申込んだ」→「申込 [む] (んだ)」	異同
64.	87	5	「望むだけの分量を…」→「望む (だけの) 分量を [けっ して]」	異同
65.	88	1	「諸貨物の一般的」→「[諸貨物の] 一般的」	異同
66.	88	6	「全生産物の分前」→「全生産物のその分前」	誤訳
67.	88	12	「家蓄は…」→「[家蓄] (それら) は」	異同
68.	8	12	「それをえる」→「それを [受け取るであろう] (える)」	異同
69.	90	8	「指摘する」→「指摘した」	誤訳
70.	90	10	「, すべての貨物」→「, すべての (他の) 貨物」	異同
71.	94	註	「可能性」→「[可能性] (可能性)」	イタ・異同
72.	94	3	この行の前に, 「(この種の場合においては, ——それは 絶えず繰り返されているのだけれども——貴金属でもつ て, あるいはそれを獲得する困難にかなりな変化をこう わり易い他の貨物でもって, 評価される貨物または収入 の価値は, 名目だけにすぎない価値の増減を意味するも のであり, それだけではわれわれにほとんど無用である	欠文

			ということはまったく明白である。)」という文節が脱げ落ちて 落ちている。	
73.	109	9	「説明や定義」→「[説明や定義] (定義や説明)」	異同
74.	110	1	「…学のすべて」→「学 [における] (の) すべて」	異同
75.	110	7-8	「購買の能力と結びつける意思」→「[購買の能力と結び ついた意思] (彼らの一般的購買手段と結びついた貨物を 購買しようとする人々の意思)」	誤訳・異同
76.	111	8	「…ような場合」→「ような価格変動の場合」	誤訳
77.	111	13	「確めらる」→「[確めらる] (決定される)」	異同
78.	112	5	「需要の範囲」→「需要の [範囲] (範囲)」	異同
79.	112	6	「需要の範囲」→「需要の [範囲] (範囲)」	異同
80.	112	10	「…に同一」→「に (ほぼ) 同一」	異同
81.	112	16-7	「[…能力との程度…」→「[…能力と] の程度」	誤訳・異同
82.	113	1	「[能力と…」→「[能力] と」	誤訳・異同
83.	114	16	「さて…」→「(さて)」	異同
84.	115	3	「ならない」→「ならな [かった] (い)」	異同
85.	115	註	この註の中の、「可能性における」および「実在性におけ る」はいずれも原文ではイタリック体となっている。	イタ
86.	116	1	「額の2倍」→「[額の] 2倍」	異同
87.	116	12-3	「, この貨物」→「, [この] 貨物」	異同
88.	116	15	「意思または能力」→「[能力または意思] (意思または能 力)」	異同
89.	119	2	「需要の範囲」→「需要の [範囲] (範囲)」	イタ・異同
90.	119	5	「供給と需要」→「[供給と需要] (需要と供給)」	異同
91.	119	7	「供給の範囲」→「供給の [範囲] (範囲)」	異同
92.	119	7	「需要に」→「需要 (の範囲) に」	異同
93.	120	5	「強いとか強度とか」→「[強い] (強い) とか [強度] (強 度) とか」	イタ・異同

94.	120	10	「消費の範囲」→「消費の〔範囲〕(範囲)」	イタ・異同
95.	121	11	「市場にもたらされかつ売られている」→「市場で売買されている」	誤訳
96.	125	1	「それに」→「それ(ら)に」	異同
97.	125	8-9	「, アダム・スミスが市場価格と呼んだものと同様に自然価格と呼んだもの」は2版の表現であって、初版では、「[自然価格と同様にアダム・スミスが自然価格と呼んだもの]」となっている。	異同
98.	127	1	「生産費」→「生産〔価格〕(費)」	異同
99.	127	5	「, しかも」→「, [反面] (しかも)」	異同
100.	127	7	「能力」→「[[能力] (資力 means)」	異同
101.	127	10	「この原費は」→「[[この原費] (それ) は」	異同
102.	127	15	「永続的価格」→「[[永続的] (永続的) 価格」	イタ・異同
103.	128	10	「そして」→「[[そして]」	異同
104.	129	5	「できた」→「でき〔る〕(た)」	異同
105.	129	9-10	「それを造るに」→「[[それを造るに]」	異同
106.	132	12	「はるかに」→「[[はるかに]」	異同
107.	132	12	「彼らの報酬」→「彼らの(貨幣での)報酬」	異同
108.	133	8	「決して」→「[[決して]」	異同
109.	133	13	「占有される」→「占有〔される〕(される)」	イタ・異同
110.	134	1	「及び資本」→「及び〔資本] (利潤)」	異同
111.	134	2	「するであろう,」→「する(であろう),」	異同
112.	134	4	「…は決して,」→「は〔決して],」	異同
113.	134	註	「…Book I. ch. vi…」→「Book I. ch. [vi] (vii)」	異同
114.	134	13	「貨物の価格は,」→「貨物の(通常)価格は,」	異同
115.	137	4	「そして値する」→「そして〔値する〕(値する)」	イタ・異同
116.	145	10	「決定せられる」→「[[決定せられる] (測定される)」	異同
117.	147	1	「…もある。)」に続いて、「(そしてわれわれが知っている	欠文

			どの段階の社会においても、こうしたことが行なわれるわけではない。」という1文がある。	
118.	150	15	「…原料が彼…」→「原料が [必ず] 彼」	異同
119.	150	15	「時間 <sup>・</sup> は」→「[時間] (時間 <sup>・</sup> )」	イタ・異同
120.	151	3	「おいて、」→「おいて、(それは)」	異同
121.	151	8	「彼が受取る」→「[彼が] 受取る」	異同
122.	151	8-9	「生ずる以前」→「生ずる [はるか] 以前」	異同
123.	151	10	「生活資料」→「生存資料」	誤訳
124.	151	16	「弓矢等からなる」→「弓矢等 (の) [からなる]」	異同
125.	152	3	「1年以後」→「[1年] (その年) 以後」	異同
126.	154	2	「…は時に2,」→「は [時に] 2,」	異同
127.	154	4	「と述べる…」→「と [示す] (述べる)」	異同
128.	158	1	「(かかる貨物においては、資本…」→「(かかる貨物においては、) 資本」	誤訳・異同
129.	158	2	「資本の価値が…労働の価値に…」→「資本 (の価値) が…労働の [価値] (分量) に」	異同
130.	158	3	「そして)」→「(そして)」	誤訳・異同
131.	160	1	「これらの対立…」→「これら (2つ) の対立」	異同
132.	175	12	「相対価値を決定するものが確かにこの労働ではないと,」→「相対価値を [決定するもの] (決定し, あるいは測定するもの) はこの労働のみではないと,」	誤訳・異同
133.	195		「同一の時…」→「同一の所」	誤訳
134.	196	9	「…労働量または労働」→「[労働量または] 労働」	異同
135.	196	11	「名目価格」→「[名目価格] (貨幣価格)」	異同
136.	202	5	「結果は困難ではない…」→「結果は異ならない」	誤訳
137.	224	15	「乏しい生活資料」→「乏しい支持資料」	誤訳
138.	231	15	「…代えて彼の尺度を用…」→「代えて労働を彼の尺度として用」	誤訳

139.	260	註	「その自然状態において」→「[その自然状態において] (その自然状態において)」	イタ・異同
140.	262	8	「もっと近代的」→「[もっと] 近代的」	異同
141.	262	10	「に, 最近…」→「に, [最近]」	異同
142.	265	6	「大なる部分の」→「大なる [部分] (分量) の」	異同
143.	265	6-7	「[土地]」→「[地球 earth]」	誤訳
144.	266	16	「, その種々…」→「, [その] (この) 種々」	異同
145.	267	2	「能力」→「[能力] (能力)」	イタ・異同
146.	267	12	「, すべての貨物」→「, すべての [貨物] (物品)」	異同
147.	268	7	「人口の原理」→「人口の (諸) 原理」	異同
148.	271	15	「大抵の国」→「大抵の (すすんだ) 国」	異同
149.	276	11	「能力」→「[能力] (能力)」	イタ・異同
150.	277	1-2	「全然肥沃度」→「全然 (自然的または獲得された) 肥沃度」	異同
151.	281	1	「…の剰余生産物」→「の (一般的な) 剰余生産物」	異同
152.	283	10	「生活資料を…」→「生存資料を」	誤訳
153.	285	註	「産出しえない」→「産出し [え] ない」	異同
154.	286	6	「一部分」→「[一部分] (一部分)」	イタ・異同
155.	288	4	「労働が…」→「[労働] (穀物賃金) が」	異同
156.	288	9	「そして各…」→「そして (この種の) 各」	異同
157.	289	註	「生産費」→「[生産費] (労働生産費だけ)」	異同
158.	294	7	「必要なるすべて」→「必要ならざるものすべて」	誤訳
159.	296	12	「商業の勤勞の…」→「商業の産業の」	誤訳
160.	297	1	「…困難と利子…」→「困難と (ともに,) 利子」	異同
161.	297	8	「資本が…」→「資本 (それ) が」	異同
162.	298	7	「分益農制」→「分益農制」	イタ
163.	298	7	「乏しい生活資料」→「乏しい生存資料」	誤訳
164.	298	16	「種類の勤勞の…」→「種類の産業の」	誤訳

165.	300	8	「 <u>価格</u> の増大。」→「[[ <u>価格</u> ] ( <u>価格</u> ) の増大。]	イタ・異同
166.	307	註	「[[しかし…地代にか?]]という1文は、2版では、「(アメリカの高い穀物労賃は最後には地代に帰するのであって、利潤に帰するのではないであろう。)」と変更されている。	欠文・異同
167.	307	註	「1日1ブッシェル」→「1日 [1] (半) ブッシェル」	異同
168.	307	註	「かかる労賃の下落」→「[[かかる] (きわめて高い穀物) 労賃の下落」	異同
169.	307	註	「必要であろう。」→「必要で [あろう] (る)。」	異同
170.	310	10	「穀物の交換価値」→「穀物の [交換] 価値」	異同
171.	310	13	「その人口の…」→「その [現在の] 人口の」	異同
172.	310	13	「高いこと」→「高 [い] (かった) こと」	異同
173.	312	1	「(その) 価格の…」→「その [価格] ( <u>価値</u> ) の」	異同
174.	312	10	「…価格の騰貴」→「[[ <u>価格</u> ] ( <u>貨幣価格</u> ) の騰貴」	異同
175.	315	3	「…は、農業者…」→「は、(その) 農業者」	異同
176.	320	7	「, 数年前の…」→「, 数年前 [の] (に耕作された)」	異同
177.	322	9	「…が、この…」→「が、(この)」	異同
178.	323	1	「粗生産物」→「(増大した) 粗生産物」	異同
179.	323	4	「 <u>発</u> する」→「[[ <u>発</u> する] ( <u>発</u> する)』	イタ・異同
180.	324	12	「[[極めて度々]]」は、2版では「(しばしば)」と変更されている。	異同
181.	329	3	「労働の労賃」→「労働の (貨幣) 価値」	異同
182.	330	5	「労賃の騰貴」→「(穀物) 労賃の騰貴」	異同
183.	332	12	「 <u>比</u> 例」→「[[ <u>比</u> 例] ( <u>比</u> 例)』	イタ・異同
184.	333	註	2版では、「…より大である。」という文に、「(したがってそれは、よりすぐれた熟練と儉約 economy, それに耕作の改良に言及される必要がある。)」が続いている。	欠文・異同
185.	336	6	「…労賃を…」→「地代を」	誤訳



186.	337	7	「…土壌はもはや…」→「土壌（のあるもの）はもはや」	異同
187.	337	14	「すべては以前」→「すべては（価格において）以前」	異同
188.	338	4	「…のある原因」→「のあるすべての原因」	異同
189.	340	1	「…おいて、地代…」→「おいて、（もしきわめて決定的な農業改良がともわなければ、）地代」	欠文・異同
190.	343	1-2	「（農業上の現実…）」→「（農業上の熟練の現実…）」	欠文
191.	344	8	「穀物の価格は、」→「穀物 [の価格] は、」	異同
192.	345	1	「自然価格または…」→「[自然価格または]」	異同
193.	345	4	「…をはるかに…」→「を [きわめて] はるかに」	異同
194.	346	14	「…少ない資本を…」→「少ない [資本]（経費）を」	異同
195.	347	5	「国の現存する状態」→「国の [現存する]（現実の）状態」	異同
196.	347	17	「そしてすべて…」→「そして（最上の土地と同様に）すべて」	異同
197.	348	1-2	「現実の資本を維持するに必要なところまで低減せられ、そして労賃は」という下りは2版のみにみられる。	異同
198.	349	註	「…より取ったもの」→「より [写し]（取っ）たもの」	異同
199.	349	註	「軽微な変更」→「[軽微な] 変更」	異同
200.	357	7	「…あるが、しかし…」となっているこの2版の部分は、正確には「…ある。土壌の等級に関する学説はもともと大切ではあるが、しかし」である。	欠文
201.	358	3	「, 穀物はその…」→「, 穀物は（ほぼ）その」	異同
202.	359	10	「, けだし荒れた」→「, けだし（もし農業者が何らの地代も支払わないならば、）」	欠文・異同
203.	359	16	「, その必要価格」→「,（ほぼ）その必要価格」	異同
204.	362	2	「[第1の原因は疑いもなく]」となっているが、実際には、これ続く「特にたがいに大いにへだたっている諸国においては、」という文句も初版だけの表現である。	異同

205.	363	14-5	「(必要とされる労働その他の供給の条件)[使用されなければならない資本及び労働]の分量のより大なることである。」→「(必要とされるより大きな分量, およびその他の供給の諸条件であろう。)[使用されなければならない資本および労働の分量のより大なることであろう。]」	誤訳・異同
206.	363	17	「…に絶えず頼る」→「に[絶えず]頼る」	異同
207.	363	17	「…に, すなわち,」→「に, (すなわち,)」	異同
208.	364	3	「, 進歩的な国」→「, [進歩的な国] (進歩的な国)」	イタ・異同
209.	365	11	「…は穀物につき」→「は[穀物につき]」	異同
210.	366	2-3	「粗生産物の」→「[粗生産物] (食物) の」	異同
211.	370	4	「…最近議会で」→「[最近] 議会で」	異同
212.	371	17	「…常に安心して」→「常に(安心して)」	異同
213.	376	4	「発明に依存」→「発明に(主として)依存」	異同
214.	378	4	「實際上」→「[實際上] (實際上)」	イタ・異同
215.	379	9	「及び労賃の…」→「及び(穀物) 労賃の」	異同
216.	387	註	「Ibid. p. 44.」→「[Ibid. p. 44.] (Ibid. p. 50.)」	異同
217.	389	2	「この低き労賃を…」→「[[この低き労賃] (それら) を」	異同
218.	396	9	「比例を増大する」→「[比例を増大する]」	イタ
219.	399	10	2版では、「…である。」の後に註が付してあり、トレンズの第2版『穀物自由貿易論』(1820年)に言及している。依光訳上巻283頁註を参照。	欠文
220.	411	6	「も, 地主の」→「も, [地主] (土地所有者) の」	異同
221.	419	註	「Book I. c. xi.」→「Book I. p. xi.」	誤訳
222.	423	2	「高き取得」→「高き(国民的)取得」	異同
223.	425	註1	「国民的利潤」→「[[国民的] (国民的) 利潤」	イタ・異同
224.	426	1	「に, 多くの」→「に, (たいへん) 多くの」	異同
225.	428	7	「その享楽」→「社会の享楽」	誤訳
226.	430	註	「…1事例である。」→「1事例であ[る] (った)。」	異同

227.	430	註	「非難せられるであろうのは、」→「非難 [せられるであ ろう] (されねばならない) のは、」	異同
------	-----	---	--	----

吉田訳下巻

228.	7	3	「, 及び娯楽品」→「, 及び奢侈品」	誤訳
229.	14	11	「, 他の事情にして等しき限り,」→「, 他 <sup>・</sup> の <sup>・</sup> 事 <sup>・</sup> 情 <sup>・</sup> に <sup>・</sup> し <sup>・</sup> て <sup>・</sup> 等 <sup>・</sup> し <sup>・</sup> き <sup>・</sup> 限 <sup>・</sup> り,」	イタ
230.	15	9	「…尊敬ではなく, 需要…」→「尊敬 [ではなく], (ある いはこうした熟練に報酬を与えようとする利害関係のない 願望ではなくて,)」	異同
231.	16	4	「真実価格」→「自然価格」	誤訳
232.	17	4	「は極めてへだたった」→「は (極めて) 大きくへだたっ た」	異同
233.	17	7-8	「平均的需要」→「[平均的] (有効) 需要」	異同
234.	17	8	「(有効) [平均的] 供給」→「平均的供給」	異同
235.	22	15	「生活資料」→「生存資料」	誤訳
236.	27	3	「生産資料」→「生活資料」	誤訳
237.	27	3	「外 <sup>・</sup> 見 <sup>・</sup> 的 <sup>・</sup> 支 <sup>・</sup> 配 <sup>・</sup> 力 <sup>・</sup> 」→「[外 <sup>・</sup> 見 <sup>・</sup> 的 <sup>・</sup> ] (外 <sup>・</sup> 見 <sup>・</sup> 的 <sup>・</sup> ) 支 <sup>・</sup> 配 <sup>・</sup> 力 <sup>・</sup> 」	イタ・異同
238.	32	4-5	「…は極めて急速」→「は [極めて] 急速」	異同
239.	34	1	「, 時に生活」→「, [時に] 生活」	異同
240.	34	2	「それを [時に] 引下…」→「それを時に引下」	異同
241.	39	14	「…需要が」→「需要 (との両者) が」	異同
242.	43	1	「…は, ほとんどない」→「は, [ほとんど] ない」	異同
243.	48	4	「需要とが」→「需要と (の両者) が」	異同
244.	48	4	「極大なる,」→「極大 [なる] (となりえる)」	異同
245.	48	4	「中点」→「[中点 medium] (中間 mean)」	異同
246.	54	9	「…で支配し…」→「で購買し」	誤訳
247.	68	13	「この時期」→「[この] (その) 時期」	異同

248.	69	1	「中点以上,」→「[中点 middle point 以上] (中以上の点)」	異同
249.	71	16	「実際貨幣の価値の下落が」→「実際 [貨幣の価値の下落] (通貨の増加) が」	異同
250.	73	10-1	「労働の価格」→「労働の (貨幣) 価格」	異同
251.	73	13	「, 時に極めて」→「, 時に [極めて]」	異同
252.	74	10	「…ないであろうが,」→「ない [であろう] が,」	異同
253.	75	5-6	「, けだし…避けたいからであり,」→「, [けだし] …避け [たいから] (んがため) であり,」	異同
254.	76	1-2	「…イングランドの労働者ほどの」→「[[イングランド人 English] (イングランドの労働者) ほどの」	異同
255.	81	6	「利潤の率」→「利潤の [率] (率)」	イタ・異同
256.	81	9	「, 利潤は…」→「, 利潤率は」	誤訳
257.	97	2	「人口の増大」→「人口の (かなりな) 増大」	異同
258.	98	5	「…進むにつれ,」→「[進む] (増大する) につれ,」	異同
259.	98	10	「分前」→「[[分前] (分前)」	イタ・異同
260.	99	3	「比例」→「[[比例] (比例)」	イタ・異同
261.	99	14	「必然的減少」→「[[必然的] (必然的) 減少」	イタ・異同
262.	100	3	「, 時に減少し」→「, 時に (大きく) 減少し」	異同
263.	102	6	「比例」→「[[比例] (比例)」	イタ・異同
264.	108	2	「資本の供給」→「資本 (, 及び生産物) の供給」	異同
265.	144	12	「生活資料」→「生存資料」	異同
266.	158	12	「(彼の…」→「(しかし彼の…」	欠文
267.	159	17	「に, 生産物」→「に, (土壌がまだ肥沃である間は,) 生産物」	欠文
268.	160	1	「より低く」→「(はるかに) より低く」	異同
269.	160	3	「蓄積を」→「蓄積の手段を」	誤訳
270.	160	4	「しかし資本…」→「[[しかし] 資本」	異同
271.	166	4	「要費した」→「要費 [する] (した)」	異同

272.	166	13	「 <u>唯一の原因</u> 」→「[唯一の原因] ( <u>唯一の原因</u> )」	イタ・異同
273.	167	11	「 <u>現実の</u> 」→「[現実の] ( <u>現実の</u> )」	イタ・異同
274.	167	11	「 <u>通常のかつ平均的な</u> 」→「[通常の] ( <u>通常のかつ平均的な</u> )」	イタ・異同
275.	168	6	「[もし…]」→「[しかしもし…]」	欠文
276.	179	10	「 <u>欲求せら…</u> 」→「[欲求] ( <u>要望</u> ) せら」	異同
277.	181	註	「は、正に私が…と考える所のものである。」→「は、[正に私が] … [と考える所のもの] である。」	異同
278.	182	6	「 <u>そのみでは、</u> 」→「[そのみでは] ( <u>そのみでは、</u> )」	イタ・異同
279.	189	9	「 <u>利潤に関するこの新学説…</u> 」→「[利潤に関する] (これらの) 新学説」	異同
280.	191	4	「 <u>労働及び資本</u> 」→「労働 [及び資本]」	異同
281.	201	13	「 <u>かかる節儉的習慣</u> 」→「[かかる] (度の過ぎた) 節儉的習慣」	異同
282.	202	註	「…、彼の産業は…及び産業の奨励…」→「、彼の勤労は…及び勤労の奨励」	誤訳
283.	205	7	「 <u>生活資料</u> 」→「生存資料」	誤訳
284.	213	12	「…に著しく出づる」→「に [著しく] 出づる」	異同
285.	216	註	「 <u>通常利潤</u> 」→「通常利潤率」	誤訳
286.	221	7	「 <u>大きな部分</u> 」→「大きな [比例] 部分」	異同
287.	222	7	「、当然に、」→「、[当然に] (おそらく,)」	異同
288.	222	16	「 <u>困難なこと</u> 」→「[困難] (特異) なこと」	異同
289.	228	6	「 <u>同一の原因…</u> 」→「同一の原理」	誤訳
290.	237	2	「 <u>対する需要</u> 」→「対する有効需要」	欠文
291.	238	1	「 <u>生活資料</u> 」→「生存資料」	誤訳
292.	238	13	「 <u>彼らが</u> 」→「[彼ら] (多数の人) が」	異同
293.	246	9	「 <u>社会状態</u> 」→「[社会状態] (国家または社会)」	異同
294.	255	10	「 <u>ではなく、</u> 」→「では [なく] (ないであろうし,)」	異同

295.	255	12	「資本を」→「資本（——その1部分は必ず固定されていなければならない——）を」	異同
296.	256	2	「減少することなしに」→「[減少することなしに] (減少することなしに)」	イタ・異同
297.	272	5	第2版では、「…であろう。」という文に、「(したがって生産された分量はととも著しく減少されるであろう。)」という1文が続いている。	欠文
298.	273	2	「機械の採用」→「機械の [採用] (増大)」	異同
299.	274	1	「価値の大なる」→「価値 (の両方) の大なる」	異同
300.	274	5	「減少」→「[喪失] (減少)」	異同
301.	277	11-2	「は、大いに増大」→「は、[大いに] 増大」	異同
302.	285	10	「, 絶対に必要」→「, [絶対に] 必要」	異同
303.	288	註	「全く同意…」→「[全く] 同意」	異同
304.	299	1	「そして普通…」→「[そして] 普通」	異同
305.	304	8	「, ほとんど何人も富んでいないであろう。」→「, [ほとんど何人も富んでいない] (富むものはきわめて少い) であろう。」	異同
306.	321	6	「騰貴」→「下落」	誤訳
307.	321	11	「製造業」→「製造業者」	欠文
308.	321	11	「労働者の労働を」→「労働者 [の労働] を」	異同
309.	325	14	「国民的富の増進」→「国民的富の (さらなる) 増進」	異同
310.	325	16	「生活資料」→「生存資料」	異同
311.	331	1-2	「仮定によれば…であろう。」という1文は初版だけにみられる。	異同
312.	334	2	「含意」→「[含意] (含意)」	異同
313.	334	2	「…と明確に」→「と (もっとも) 明確に」	異同
314.	335	4	「増大」→「[増大] (増大)」	イタ・異同
315.	335	6	「, 依然同一である,」→「, [依然同一である] (依然同	異同

			一である),」	
316.	344	7	「大いに増大」→「大いに〔全般に〕増大」	異同
317.	345	1	「…収入の増大…支出の減少…」→「〔収入の増大〕（収入の増大）…〔支出の減少〕（支出の減少）」	イタ・異同
318.	345	註	「p. 139,」→「〔p. 139,〕 (p. 132,)」	異同
319.	345	9	「減少を伴は」→「減少を〔一切〕伴は」	異同
320.	350	7	「自然の大法則」→「自然の〔大〕法則」	異同
321.	354	8	「部分が消費」→「部分が（有利に）消費」	異同
322.	356	4-5	「…無限なること…制限せられる…」→「〔無限なること〕（無限なること）…〔制限せられる〕（制限せられる）」	イタ・異同
323.	366	2	「生活資料」→「生存資料」	誤訳
324.	366	12	「, 健全,」→「, 健康 health,」	誤訳
325.	368	15	「最も無愼慮な課税」→「最も愼慮ある課税」	誤訳
326.	377	10	「増大する」→「増大する〔であろう〕」	異同
327.	381	14	「されている,」→「されて（きて）いる,」	異同
328.	382	12	「収入の一般的減少」→「収入の〔一般的〕（大）減少」	異同
329.	382	16	「決定的な妨げ」→「〔決定的な〕妨げ」	異同
330.	383	1	「決定的に不足」→「〔決定的に〕不足」	異同
331.	385	10	「物（個人的消費）」→「物及び（個人的奉仕）」	誤訳
332.	386	1	「供給の大原理」→「供給の〔大〕原理」	異同
333.	389	3	「かつはるかに」→「かつ〔はるかに〕」	異同
334.	391	13	初版では、「…得ようかと。」という文の後に、「〔私は実際、われわれは蓄積してはならないとけっしていおうとするのではない。〕」という1文がある。	欠文
335.	394	15	「重要な」→「（もっとも）重要な」	異同
336.	401	9	「この価格下落」→「この（農業生産物の）下落」	異同
337.	405	6	「積極的害悪」→「眼前の positive 害悪」	誤訳
338.	407	5	「えず, しかも…」→「えず, [しかも]」	異同

339.	407	11	「招いた」→「招 [く] (いた)」	異同
340.	409	11	「, 不況を…」→「, 一般的不況 adversity」	欠文
341.	409	11	「好況を共に」→「(好況を) 共に」	異同

#### IV. 第2版の労働（勤労）等級論

前節では、吉田訳にひそむ欠陥を多少なりとも矯正し、その利便性を高めるとともに、吉田訳が通読にたえうるよう努めた。しかし若干の欠文がありはしたけれども、吉田訳はむしろプレンの集注版でさえ見過ごしてしまっている両版間の相違を抽出してくれているし（吉田訳上33頁15行目、196頁17行目、340頁3行目、下146頁16行目のイタリック体部の指摘、180頁1行目）、またその各所に盛り込まれている訳者註もいまなお至便である（上186頁註、235頁、273頁註、391頁、下38頁註、275、319頁）。あらためて吉田訳の真価を思い知らされたというのが率直な実感である。そのうえで以下では、この吉田訳を有効に活用しながら、『原理』の改訂の形跡の一端を振り返ってみたい。

冒頭であらかじめ前置きしていたように、筆者は2版『原理』において「不生産的 (unproductive) 消費者」の範ちゅうが拡大され、その反面で「不生産的労働」が「個人的奉仕 (personal services)」によって代位されたのではないかという見当を抱懐している。もっと平明に敷衍するなら、第2版においては、再生産を目的とした資本家の支出以外の消費はすべて一様に不生産的消費と把握され（〔7〕185、193頁）、それゆえに大部分の資本家（「ジェントルマン農業者」〔9〕上45、62頁、も含む）以外の人々（地主はもとより、労働者総体、および一部の資本家までの）はひとしく「不生産的消費者」と把握されている、さらに他方では多種多様な労働は「生産的労働と個人的奉仕との2種類」（〔9〕上57頁）に類別されるようになり、しかもそのさい初版では「不生産的労働」に分類されていた一部の労働（たとえば商業労働）が「生産的労働」へと組み替えられた。概略、こ



のように推測しているのである。

しかしながらこうした推し当てのよって立つ根拠は多くあるわけではない。その一つは、初版の本文では4回しか用いられていない<sup>23)</sup>〔4〕上65, 66, 75頁)「個人的奉仕」という術語が、2版においては、「不生産的労働に代えるに個人的奉仕をもってする」〔9〕上56—7頁)という改正〔9〕下182, 188, 189, 204, 349, 350, 365, 367, 385頁)等を通して多用、かつ重用<sup>24)</sup>されていることである〔9〕上42, 56, 57, 59, 63, 65, 75頁, 下38, 39, 48, 104, 179, 201, 291, 293, 297, 353頁)。それに個人的奉仕が「不生産的労働」と同等に扱われたり(第2篇第9節の見出し, ならびに〔9〕下179頁),あるいは「個人的奉仕(者)」が「不生産的消費者」に代ってすえられたりしている〔9〕下201, 297頁)ことをも重ね合わせるなら、2版においては、「個人的奉仕」は「不生産的労働」もしくは「不生産的消費」とほぼ同義語として使用されている<sup>25)</sup>と解しえよう(吉田訳下349頁)。つまり「僕婢(menial)であろうと、知的なもの(intellectual)であろうと自発的に支払われるすべての個人的奉仕」〔9〕下367頁, また〔9〕上42, 76頁も参照)は富(第1図を参照)の生産ないしは分配に直接寄与せず、たんに「生産のあらゆる間接的な原因のうちもつ

第1図 マルサスによる富の概念の変遷

著 作 富の要素	1820年の初版 「原理」〔(4)上54—5頁)	1824年の「四季評論」 に寄せた「経済学」 〔(6)①87頁)	1827年の「経済学」 における諸定義 〔(7)171頁)	1828—30年の「修正 手稿」(Pulened, <i>op. cit.</i> , Vol. II, p. 24)	1836年の第2版 「原理」〔(9)上54—5頁)
物的対象物	○	○	○	○	○
必要で、有益、かつ 愉快なもの	○	○	○	○	○
交換価値を有する	—	○	—	—	—
人間労働の産物	—	—	○	○	—
私物化されている	—	—	○	—	○

(注) Pulen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 296 に依拠して作製。

とも有力な……消費」(〔7〕76頁, また〔9〕上77頁も参照)を「不生産的消費……生存資料および享樂のための収入としての富の消費」(〔7〕185頁)として営むにすぎないと理解され(〔9〕上57頁, 下266, 349, 350, 377頁, また〔6〕①89—90頁), つまるところ「適当な比例 (adequate proportion)」(〔9〕下349頁)の「個人的奉仕」が帰結, 切望されているのである(〔9〕下179, 350, 377頁)。

そのさいに, 何にもまして関心を引き寄せられるのは, マルサスが1832年3月6日付でチャーマーズ (Thomas Chalmers) に宛てた私信によって, こうした「個人的奉仕」の重視が2版の編者の意向ではなく, まぎれもなくマルサス自身の所見の変化から生じていると察知できることである。すなわちマルサスは, その書状の中で, 「不生産労働という用語は不適切 (unfortunate) であり, 現在それを個人的奉仕にとり替えている最中です。しかし社会に利益を潤すこれら2つの異なった手段にはなんらかの区分が欠かせないと得心してはいます。……さらに, 富 (通常の意味での) の増進に関連した生産と消費との間の適正な (proper) 均衡は生産的労働と個人的奉仕との間の適正な比例に大きく左右されます。もしそうであるなら, こうした命題を提示するのに色々な用語は絶対に不可欠です。」<sup>26)</sup>と認めているのである。

さらに, 第2版における「個人的奉仕」の強調, とりもなおさず「不生産的労働」の後退という基調を念頭において, 初版では「まったく必要」(〔4〕上60頁)であるとか, あるいはまた「絶対的に必要で」(〔4〕上61頁)あるとかと確言されていた「生産的労働」と「不生産的労働」との区別の必要性は, 2版に至っては, 「きわめて有用」(〔9〕上60頁), ないしは「望ましい」(〔9〕上61頁)というように緩和, 稀薄化されている点(〔4〕上66—7頁, 〔9〕上66—7頁も参照)に焦点を集めるなら, どのような推考が可能となってこようか。

たしかにマルサスは初版においても, 「労働の生産性の程度の差という原理」と, あるいは「労働等級論」や「生産性の等級 (scale)」(〔4〕上71,

74頁)とも呼称されるべき着想を開示してはいた<sup>27)</sup>けれども、結局はスミスの生産的労働と不生産的労働の大別<sup>28)</sup>を採用、踏襲した。その後も、マルサスは1815年10月から翌月にかけてリカードと意見を取り交わして以来の「勤労の生産性」<sup>29)</sup>もしくは「労働の生産性」<sup>30)</sup>（〔9〕下97, 117, 118, 126, 146頁）に関わる問題に頭を痛めつづけ、たとえば1827年にはセーに宛てて、「善政や道徳的資質が物質的富の生産にとっても利益をもたらすものである点に疑いを抱くわけではなく……善き教育や、善き徳性や、善き政治は富以上に値しましょう」<sup>31)</sup>と述べたりしてはいるけれども、やはり「私はアダム・スミスの物質的理論に若干反対すべきものを見出しましたが、それよりもっと非物質的理論の方に反対すべきものがあるようにおもわれるのであります。」<sup>32)</sup>と真情を打ち明けるにおわっている。

ところが第2版では、「教育費に関しては、その少からざる部分が……物質物の生産と分配とに必要な熟練の獲得に用いられているのであり、またこの熟練を教える手段をもっている者は自らこの種の生産および分配に従事しているのであるから、さらにこのように獲得された熟練は最後にはその価値に従って物質物に実現されるであろうから、このように用いられた資本は明らかに、最も自然の意味における生産的労働を維持しているものと考えられなければならない」（〔9〕上59頁）と立言されていて、このやや長い引用文から「商業、製造業……の熟練」<sup>33)</sup>（〔4〕上67頁、また〔3〕III183, 201頁、〔4〕上364, 365, 423頁、下289, 306, 376頁、〔5〕61頁、〔6〕②66頁も参照）を身につけた労働者、およびそれを教授する教育者は生産的労働者であると明瞭に判別されていることがわかる<sup>34)</sup>。別言するなら、初版では不生産的労働者に識別されていた「商業階級」（〔4〕下353頁）ならびに教師の一部が、2版においては生産的労働者へと編入され（〔4〕上79頁）、他面個人的奉仕は召使<sup>35)</sup> (menial servants)、政治家、軍人、裁判官、弁護士、医者、それに牧師に限局されていくのである（〔9〕下365頁）。そしてこの点には十分すぎるほど耳目を傾注しなければならないであろう。つまり2版においては、生産的労働と個人的奉仕という労働の二分

類がその枠組を形成しているとはいえ、あわせて「一定分量の労働によって獲得せられる生産物の分量」(〔9〕下160頁註)の多寡を労働ないしは勤労の「生産性の等級」とする労働(勤労)等級論が実際上部分的にしる導入されていて、この限りでは、「個人的(personal)熟練」(〔4〕下359頁)や、「個人的勤労」(〔4〕上34頁)あるいは「個別的(individual)勤労」(〔4〕下175頁)といった「個人的資質(qualities)」<sup>36)</sup>(〔9〕上42頁)の一切が「不生産的労働」としてかたくなまでに排斥されているとは考え難いのである。

## V. むすびにかえて

言うまでもなく、以上のような第2版『原理』における修正が、マルサス本人の所見の変更をかなり反映しているこそ、マルサスが労働者の「獲得した熟練の程度と彼らがえる物質の多少」(〔4〕上72頁)との比例関係を考えていたと推断でき、ひいてはマルサスは「その熟練と勤労<sup>37)</sup>との程度」(〔1〕III116頁)に応じた労働階級への報酬を主張し(〔1〕III142—3頁,〔3〕IV283頁),そして彼らのうち「一定程度の勤労と熟練」(〔4〕下223, 224, 228頁)もしくは「より優れた勤労と熟練」(〔3〕III293頁)を体得,具備した「勤労階級」だけが「中流階級(middle classes)」<sup>38)</sup>(〔4〕上66頁,下301, 307, 375, 394頁)へと上昇,変容を遂げていくと洞察していた<sup>39)</sup>と推論してもさほど支障はないということになる。そればかりか,労働階級が「不生産的消費者」として,自らその「賃金のための維持基金」の一部を創出していくと仮定されていることを考え合わせるなら,もちろん地主および個人的奉仕者の収入を源泉とする不生産的消費もきわめて緊要であると説かれてはいる(〔9〕上76頁,下253, 365—8頁)けれども,同時にまた「社会の下層階級の間における便宜品および奢侈品にたいする……有効需要」(〔4〕下249頁,また〔9〕下162頁も参照)も脳裏に浮かべている<sup>40)</sup>のも疑う余地はないであろう。むしろ「個人的奉仕に従事

する者を含んでの労働の労賃によって生きるものは、年々の生産物のはるかに最大部分を受取りかつ費し、政府の維持のためにきわめて巨額を租税に支払い、そして物理的勢力のはるかに最大をなすものである」〔4〕下291頁、また〔5〕57頁や〔8〕39頁も参照）という章句に着目するなら、マルサスは「全国民を代表する消費者の永続的利害」〔2〕III243頁）の実現をより願望してやまなかったと考えてもあながち不合理ではないであろう〔4〕下360頁）。

ともあれこうした見方の当否は、マルサスが自分自身の手で第2版『原理』における改訂のすべてを完遂したという前提に立って、はじめて確定されてくるであろう。公知のように、第2版の編者はオッター（William Otter）であれ、カザノヴァ（John Cazenove）であれ<sup>41)</sup>、いずれにしろマルサス自身ではない。したがって第2版『原理』における数多の改変のうちいずれがマルサス張本人の意図にそったものであり、またそうでないのかという判定問題<sup>42)</sup>がつねにつきまってくる。この解決への残された切札は、マルサスが2版の刊行に向けての準備期間（とくに1820—2年および1828—30年）に書き留めている「修正手稿（Malthus' Manuscript Revisions）」<sup>43)</sup>（以下、「手稿」と略記）を導きの糸にして、考証していく方法であるけれども、この課題に最終的な決着をつけてくれるようにはおもわれぬ。

たとえばマルサスは1827年5月7日付で初版『原理』の発刊者であるマレ（John Murray）に宛てて、「私は『経済学原理』が長らく品切れ状態にあるので、その新版のことばかり考えています。幾度か打診したことと記憶しております。課税、貴金属の水準、その他の問題に関する新鮮な内容が山ほどになる見通しです。これらを新版に盛り込んで出版した方がずっと得策であるのか、あるいはまた別個に公刊の方が好都合であるのか、御相談したくおもっています。」<sup>44)</sup>と書き送っている。この書面にある新しい題材のうち、貴金属の水準は実際に2版で新設された第1篇第2章第7節「同一国および異なる諸国における貨幣の価値の変動について」の中で論

及されているけれども、課税に関してはついで特定の章節を割いて議論されることはなかった。それゆえマルサスの課税論の輪郭を粗描しようとするには、彼の諸著作に散在する関連諸断篇を寄せ集めて再構成していくほかない<sup>45)</sup>。ところが、この場合にも、やはりこの難問に達着してしまうのである。

このように、遺憾ながら、本稿に限らず、2版『原理』をその視界におさめようとするときには、概してこの宿命的な難題を背負うことになる。そしてここでこれを解消する手立てを提示できるわけでもない。ただわずかに付言しえるのは、『人口論』におけるほど鮮明にはではないにしろ、『原理』の両版においても、「私有財産制度」(〔4〕上428頁, 下350, 363頁, また〔4〕下175—6, 177, 250, 298, 369頁)に根ざした政治的および「市民的自由」(〔4〕上41頁, 下21—3頁)の下における、「われわれの境遇を改善する願望」(〔4〕下404頁, また〔4〕下355, 391頁も参照)の発現, 作用によって、より勤労である労働が「より幸福な境遇」を達成しうる(〔4〕下243頁)と述べられていて<sup>46)</sup>、下層階級のうちの一部分が富の累進的增加とあいまって漸次「一定程度の勤労と熟練」とを具していき、ついには勤労階級という姿容でもって、中流階級へと出世、変貌しうると見通されていたということである(〔4〕下371頁)。

#### 注

- 1) たとえば羽鳥卓也著『古典派経済学の基本問題』(未来社, 1972年)第3章や、同氏著『リカードウ研究』(未来社, 1982年)第7章, 第8章, あるいは大村照夫著『マルサス研究』(ミネルヴァ書房, 1985年)第5章, 第6章や, 同氏著『新マルサス研究』(晃洋書房, 1998年)第5章を, さらに中村廣治著『リカードウ経済学研究』(九州大学出版会, 1996年)第3章ならび第6章等が挙げられる。ほかにも両版の比較研究とはいえないけれども, 橋本比登志「マルサス『経済学原理』」[内田義彦・小林昇・宮崎義一・宮崎犀一編『経済学史の基礎』(有斐閣, 1964年)所収], 入江奨「マルサスの真実価値論と価値尺度論との関係についての覚書」[久保芳和博士退職記念出版物刊行委員会編『上ヶ原三十七年』(創元社, 1988年)所収], および中矢俊博著『ケンブリッジ経済学研究』(同文館, 1997年)第6章な

- ども見落とし難いであろう。なお以上の諸研究は第2版の编者によるはしがきの趣意(吉田訳上11—3頁)を適確にくんだうで、リカードウ経済学の対抗理論として『原理』を精察しようとしたいたって正統的なものと概評できよう。
- 2) 杉原四郎・真実一男編著『経済学形成史』(ミネルヴァ書房, 1971年) 280頁。
  - 3) 両訳書とともに吉田訳にみられる「生硬な訳文」(吉田訳上4頁凡例四)を改善するのに多大な努力を払っている(依光訳上巻8頁の訳者序や小林訳上10頁凡例三を参照)。ただし原典の文節の変更に伴う対応に若干不都合がみられるはする(依光訳上79頁9行目, 241頁12行目, 下247頁9行目, この正しい文段の区切りは吉田訳上94, 340頁, 下350頁で確認できる, また拙訳「マルサスの『経済学原理』の『本文概要』」『長崎県立大学論集』第33巻第4号(長崎県立大学学術研究会, 2000年) 183頁注1を参照)。ちなみに未刊ではあるけれども, 小松芳喬, 鈴木鴻一郎の両氏も『原理』の邦訳をそれぞれ1931年および終戦直後に完成させていた〔小松芳喬訳『マルサス・経済学に於ける諸定義』(実業之日本社, 1944年)あとがき321頁, ならびに鈴木鴻一郎「私のリカードウ遍歴」『リカーディアーナ』季報5(雄松堂書店, 1971年)6頁〕。
  - 4) この出版に至るまでの経緯は, プレン著溝川喜一・橋本比登志編訳『マルサスを語る』(ミネルヴァ書房, 1994年)第3章に詳しい。なおこの集注版に先行して, E. A. Wrigley & D. Souden ed., *The Works of Thomas Robert Malthus*, Vol. 5-6 (London: Pickering & Chatto, 1986) が両版の間の相違をあらかじめ抄出, 整理してはいる。
  - 5) ほかに吉田訳は両版間のパラグラフの分段の変更をも訳者注によってもらさず示してくれている(吉田訳上27, 28, 54, 84, 111, 123, 137, 147, 192, 219頁, 242頁註, 296, 332, 357, 390, 399頁, 下34, 37, 48, 92, 109頁, 142頁註2, 160頁, 202頁註, 204頁註, 319, 367, 378頁, 379頁註)。
  - 6) 南亮三郎「岩波文庫版『マルサス・経済学原理』」『人口問題』第2巻第3号(人口問題研究会, 1937年) 327—8頁。
  - 7) 小林時三郎著『マルサス経済学の方法』(現代書館, 1968年) 235頁。ちなみに小林自身は横山正彦教授の勧めで『原理』の邦訳を思い立ったと述懐している(小林「マルサスの初版『原理』」『リカーディアーナ』季報5, 3頁)。
  - 8) マルサスが資本を口にするとき, 「固定貨幣資本」(〔5〕27頁)や「浮動(floating)資本」(〔4〕下387頁)も視野においていたことにも配慮しておかねばならない。
  - 9) マルサス自らも「一般に資財の利潤の名で呼ぶのが通常である」(〔4〕下80頁, また〔7〕178頁も参照)と記しているように, 「当時なお一般には profits of stock という語がより使われていた」〔藤塚知義著『アダム・スミスの資本理論』(日本経済評論社, 1990年) 124頁〕というのが真相であろう。
  - 10) 藤塚同上書第3章, わけても114—22頁を参照。なおマルサスが座右においていたのは, 第6版『国富論』(1790年)の1791年版(全3巻)であるとされている〔Pullen

ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 289)。

- 11) これらの用例の大部分では、マルサスは商品もしくは生産物、あるいは人口または労働にたいする有効需要を想定しているのではあるけれども、「資本にたいする有効需要」〔〔4〕下383頁、また〔9〕下379頁も参照〕や「貨幣需要」〔〔9〕上132, 133頁, 下9頁註〕をもしっかりと見すえていることをも看過してはならないであろう〔ブレン前掲訳書131—5頁を参照〕。
- 12) さらに第2版においては、有効需要とともに、「有効 (effectual) 消費」〔〔9〕下324, 355, 368頁, 371頁註, 381, 382頁〕もしくは「有効 (effective) 消費」〔〔9〕下353, 369, 394, 402頁〕という用語が使われたり、あるいは「有効需要の強度 (intensity)」〔〔9〕下275頁〕や「有効需要の範囲 (extent)」〔〔9〕上125頁, また〔9〕上116頁も参照〕といった議論〔〔7〕183頁〕が持ち込まれてもいる〔森茂也著『イギリス価格論史』(同文館, 1982年) 245—6頁, ならびに同氏著『古典派経済成長論の基本問題』(同文館, 1992年) 125—6頁を参照〕。
- 13) ただし有効需要者は effectual demanders と表記されるもするが〔〔6〕②64, 64頁, 〔7〕159頁〕, 主要著作ではおおむね effective demanders とつづられている〔〔4〕下307, 310, 375頁, 〔5〕55頁, 〔8〕41頁〕。またほかにも「有効 (effective) 消費者」〔〔9〕下359頁〕という語も見出しうる。
- 14) スミスの有効需要論については、とりあえずは小林昇著『小林昇経済学史著作集 I』(未来社, 1976年) 229—45頁, あるいは大森郁夫著『ステュアートとスミス』(ミネルヴァ書房, 1996年) 第4章等を参照。
- 15) 広義における「自然的資源」〔〔1〕II59頁, 〔2〕IV220頁, 〔3〕III187, 293頁〕という用例を除いても、たとえば resources は「移民という手段 (resources)」〔〔1〕III95, 103頁〕というように広く「手段 (方法)」〔〔1〕II230, 249頁, IV98頁〕の意味で充用されている。
- 16) ただし『原理』においても、「経済学という手段」〔〔4〕上22頁〕, あるいは「労働階級の幸福のための偉大なる手段」〔〔4〕下77頁〕といった resources の用法も散在してはいる。
- 17) 入江奨「マルサスの『人口論』について」〔堀経夫博士古稀記念論文集刊行会編『経済学・歴史と理論』(未来社, 1966年) 所収, 112頁〕。
- 18) 小松訳『マルサス・経済学に於ける諸定義』283頁。なおこの訳書は, T. R. Malthus, *Definitions in Political Economy*, with a Preface, Notes, & Supplementary Remarks, by John Cazenove. (London: Simpkin & Marshall, 1853) をも射程に入れたきわめて完成度の高いものであり, この「賃金基金」の規定も新版のみに記載されている。
- 19) マルサスが初版で「労働維持のための基金」ないしはその同義語に言及しているのはわずかに4回にすぎないであろう〔〔4〕下22, 194, 220, 320頁〕。なお『原理』における労働フォンド論の展開については, 竹中恵美子「いわゆる『労働フ



фонд』と賃金運動』『経済学雑誌』第35巻第5・6号（大阪市立大学経済学会，1956年）で仔細に論じられているし，また『原理』に先行する『人口論』の諸版における「労働 фонд」の整理，検訂も吉田秀夫著『経済学説研究』（第百書房，1932年）373—8頁，および羽鳥著『古典派経済学の基本問題』374—85頁においてなされている。

- 20) 見定めえたのは，「購買者のうちの貧困階級」（〔9〕上229頁）という語句だけである。
- 21) 拙稿「吉田秀夫訳『各版対照マルサス人口論』の1補正」『長崎県立大学論集』第32巻第3号（長崎県立大学学術研究会，1998年）196—7頁を参照。
- 22) ただし吉田は別な個所では，「支持資料」と適訳しているし（〔9〕下85頁），また means of support, or supporting に「支持する資料」という適語を充当している（〔4〕上268頁，下92，215頁）。
- 23) ただし初版の「本文概要」においては，「賃金は労働者の個人的奉仕にたいして彼に支払われる報酬」という文句が追加されている〔拙訳「マルサスの『経済学原理』の『本文概要』」137頁〕。
- 24) 「個人的奉仕」は「地金問題」，「消費」，「科学上の新機軸」，「需要の強度」，「ニュートン」，「前提」，および「理論」とともに，2版『原理』の索引に付加された項目の一つでもある。反対に改訂にさいして削除されているのは，「家畜」と「穀物輸入への諸制限」との2項目である。
- 25) 渡会勝義「マルサスの経済学とケインズ」〔早坂忠編著『ケインズ主義の再検討』（多賀出版，1986年）所収〕421—3頁を参照。
- 26) Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 298.
- 27) 堀経夫「富および生産的労働についてのマルサスの定義」〔堀経夫博士喜寿記念事業委員会編『経済学の研究と教育の五十年』（世界保健通信社，1973年）所収〕239—41頁，林登良雄「マルサスの『生産的労働』と『不生産的労働』について」〔下関商経論集』（下関市立大学学会，1972年）20—7頁，および Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, pp. 306, 307 を参照。
- 28) さしあたり，楠井隆三「『国富論』における生産的労働と不生産的労働」〔大道安次郎・久保芳和編『古典派経済学の研究』（山本書店，1956年）所収〕や小林昇著『小林昇経済学史著作集 II』（未来社，1976年）129—62頁，あるいは羽鳥卓也著『国富論』研究』（未来社，1990年）第4章等を参照。
- 29) 拙著『マルサス勤労階級論の展開』（昭和堂，1998年）47—8頁。
- 30) なお「労働の生産性」という用語それ自体は，第2版『人口論』（1803年）の中に見出される（〔1〕III206，207，210頁）。また『原理』においては，類義語の「労働力の生産性」（〔4〕下132頁，〔9〕下136頁）が散在したり，あるいは「資本の生産性」（〔4〕上424頁）という語句も存しているけれども，ここでは論外においておきたい。

- 31) J. B. セー著中野正訳『恐慌に関する書簡』(日本評論社, 1950年) 183頁。
- 32) 同上訳書180頁。
- 33) マルサスが「物質的生産物の調達または監督」(〔4〕上79頁)とか、あるいは「取引上の (in trades) ……特殊の熟練」(〔4〕下14頁)とかとふれてもいるように、商業上の熟練とは「商人の行う商品の運送、貯蔵、品揃え、陳列、情報伝達等」(岡本喜裕「マルサス、リカード時代の商業および商業論」和光大学経済学部『マルサス・リカードとその時代』(白桃書房, 1981年)所収, 123頁注5)と考えられよう。他方製造業の熟練の方は、「機械工 (mechanics)」(〔9〕上63頁)などの間接工、あるいは綿紡績の「良い機械」(〔3〕III181頁)を「用いるに必要な熟練や必要な監督の知識」(〔4〕下223頁)を有した職長 (overlooker) やミュール精紡工等を指しているであろう〔堀江英一編著『イギリス工場制度の成立』(ミネルヴァ書房, 1971年) 22, 24, 35, 51-3, 65, 67, 228頁などを参照)。
- 34) 岡本「マルサス、リカード時代の商業および商業論」118-9頁。
- 35) 主として地主を中心とする「年収500ポンド以上」(〔9〕下367頁, また〔9〕下353頁も参照)の上・中流階級によって雇用された家内召使の総数は、たとえば1806年のイングランドでは91万人 (男子11万人, 女子80万人)であったと推算されている。また18世紀の後半においては、20~40人もの家事奉公人を従えた上層ジェントリを別にすれば、大半の農村ジェントリは通常7人程度の召使を抱え、また下層のジェントリは約5人の召使を雇い入れていた〔『小林昇経済学史著作集II』159-60頁, および161頁注29)。
- 36) たしかにマルサスはセーやシュトルヒ (Heinrich Friedlich von Storch) の「非物質的理論」にたいする批判を繰り返してはいるけれども(〔7〕186-90頁, 〔9〕下48-51頁), 一方では「物質的資本」(〔9〕上58, 60頁)という語句も用いられていて、2版においては「非物質的 (im-material)」(〔9〕上43頁)資本あるいはまた「精神的 (mental) および肉体的資質」(〔9〕上47頁)が富とまったく無関係であると解釈されているとはおもわれない〔Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, pp. 429-30)。
- 37) マルサスの定義(〔7〕174頁)に則して、勤労をいささか解説するなら、大略、「耐久力 (duration)」(〔9〕上213頁), 「精気 (energy)」(〔9〕上20頁), および「知的進歩」(〔4〕下362頁, また〔4〕下371頁も参照)を包摂した自由で(〔3〕III174頁), 「勤労である努力」(〔1〕II59頁)とかいつまみえよう。
- 38) middle ranks of life という表記もみられはする(〔9〕下300頁)。
- 39) さしあたり前掲拙著第1章および第2章を参照。
- 40) 奢侈品は「現物では通常の労働の維持に充てられる基金のいかなる部分をなすものではない」(〔9〕下285頁)と述べられているように、労働階級は必需品とはちがって奢侈品を市場で購入する以外にその入手方法を有しないと解されている〔ウィンチ (Donald Winch) 久保芳和訳「マルサス入門」久保編著『スミス・マ

- ルサス研究論集』(大阪経済法科大学出版部, 1997年)所収, 116頁を参照)。
- 41) プレンが1978年に発表した卓論以降, カザノヴァ説が通説として定着してきているようにおもわれる〔赤沢昭三「T. R. マルサス著: 経済学原理第2版の編集者について」『東北学院大学論集』第103号(東北学院大学文経法学会, 1986年), あるいは出雲雅志「もうひとりの『異端者』ジョン・カゼノウヴ」〔中矢俊博・柳田芳伸編著『マルサス派の経済学者たち』(日本経済評論社, 2000年)所収を参照)。
  - 42) プレン前掲訳書43, 71, 86頁を参照。
  - 43) プレンによる集注版に整理, 収録されている手稿については, スラッフア編鈴木鴻一郎訳『リカード全集II』(雄松堂書店, 1971年)編者序文xx-xxi頁, ならびにプレンの前掲訳書83-4頁で紹介, 説明されている。
  - 44) Pullen ed., *op. cit.*, Vol. I, Introduction, p. 1x.
  - 45) Pullen ed., *op. cit.*, Vol. II, p. 431, ならびに前掲拙著第5章を参照。
  - 46) 『原理』における, 下層階級への言及は多数に上っている(〔4〕上93頁, 下18, 22-3, 52, 70, 73, 78, 107頁, 〔9〕上230, 368, 381頁, 382頁註, 下75, 77頁)。またマルサスは資本家の「境遇の改善 (bettering)」(〔4〕下202頁)にもふれてはいるけれども, その場合「働く生産者 (working producers)」(〔4〕下361, 363頁)が含有されていることをも顧慮しなければならないであろう。

#### 引用文献

〔邦訳書を並記している原文引用にあたっては, それが全訳である場合には, 原典との照合のうえで訳書の当該頁のみを付記した。また訳書からの引用にさいしては幾分改訳を施したところもある。〕

- 〔1〕 T. R. Malthus, *An Essay on the Principle of Population*, 2nd ed. (London: J. Johnson, 1803)〔吉田秀夫訳『各版対照人口論I~IV』(春秋社, 1948-9年)〕
- 〔2〕 Ditto, *An Essay on the Principle of Population*, 3rd ed, 2vols. (London: J. Johnson, 1806)〔吉田同上訳書〕
- 〔3〕 Ditto, *An Essay on the Principle of Population*, 5th ed. 3vols. (London: John Murray, 1817)〔吉田同上訳書〕
- 〔4〕 Ditto, *Principles of Political Economy*, 1st ed. (London: John Murray, 1820)〔吉田秀夫訳『経済学原理上・下』(岩波書店, 1937年)〕
- 〔5〕 Ditto, *The Measure of Value* (London: John Murray, 1823)〔玉野井芳郎訳『価値尺度論』(岩波書店, 1949年)〕
- 〔6〕 Ditto, "Political Economy", *Quarterly Review*, Vol. XXX, No. LX, (Jan, 1824), pp. 297-334〔相見志郎訳「マルサスのマカロック批判1~2」『経済学論叢』第7巻第2号, 第3号(同志社大学経済学会, 1956-7年)〕

- [7] Ditto, *Definitions in Political Economy* (London: John Murray, 1827) [玉野井芳郎訳『経済学における諸定義』(岩波書店, 1950年)]
- [8] Ditto, *A Summary View of the Principle of Population* (London: John Murray, 1830) [小林時三郎訳『マルサス人口論綱要』(未来社, 1959年)]
- [9] Ditto, *Principles of Political Economy*, 2nd ed. (London: William Pickering, 1836) [吉田訳『経済学原理上・下』]
- [10] D. Ricardo, *Works and Correspondence of David Ricardo*, ed., by P. Sraffa with collaboration of M. H. Dobb, Vol. VI (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1952) [中野正監訳『リカードウ全集第VI巻』(雄松堂書店, 1970年)]

[平成12年4月25日, 入稿]